

# 経済学部講演会

第2回 詩と翻訳ポエトリーリーディングワークショップ

## 女の詩声

### 朗読・講演

■出産と大逆事件をめぐる与謝野晶子の身体の表現

バーバラ・ハートリー タスマニア大学教授

■詩歌に表われる『女人芸術』の精神

キャロル・ヘイズ オーストラリア国立大学教授

■朗読 詩集『ベットと織機』（2013年）より

新井高子 詩人

■モダニズム詩と〈私〉—左川ちか詩にみる言語実験—

菊地利奈 滋賀大学准教授

### ディスカサント

■坪井秀人 国際日本文化研究センター教授

日時： 6月25日(水) 10:00—17:30

会場： 545共同研究室(第2校舎棟5階)

お問い合わせ： 滋賀大学経済経営研究所 tel. 0749-27-1047

## 第2回 詩と翻訳ポエトリーリーディングワークショップ

### —女の詩声—

開催日：2014年6月25日（水）

場所：滋賀大学経済学部第2研究棟545研究室（彦根）

#### <プログラム>

10:50～11:00 挨拶

11:00～12:00 バーバラ・ハートリー タスマニア大学教授

「出産と大逆事件をめぐる与謝野晶子の身体の表現」

12:00～12:10 休憩

12:10～13:10 キャロル・ヘイズ オーストラリア国立大学教授

「詩歌に表われる『女人芸術』の精神」

13:10～14:10 ランチブレイク

14:10～15:10 詩人 新井高子

「朗読 『ベットと織機』より」

15:10～15:20 休憩

15:20～16:20 菊地利奈 滋賀大学准教授

「モダニズム詩と<私>—左川ちか詩にみる言語実験—」

16:20～16:30 休憩

16:30～17:15 ディスカサント 坪井秀人 国際日本文化研究センター教授

17:15～18:00 ディスカッション

18:30～ 夕食会

お問い合わせ：滋賀大学経済経営研究所 0749-27-1047

平成26年度滋賀大学教育支援基金支援事業男女共同参画推進研究助成事業

滋賀大学経済学部後援会後援

## <発表要旨>

**発表題目：出産と大逆事件をめぐる与謝野晶子の身体の表現**

**発表者：バーバラ・ハートリー タスマニア大学教授**

13回子供を生んだ与謝野晶子は、大逆事件の12人の犠牲者が絞首台の露と消えてから、わずか三ヶ月後の1911年の四月に双子を出産した。一人の子は無事にうまれたが、もう一人は死産であった。出産する二週間前ほどから耐え難い苦痛におそわれた晶子は同年の四月から五月にかけて、いろいろな雑誌などでその試練的な出産の回想を出版した。その中には、出産の試練にたえた女のつかれきった身体を描写した詩と、生まれたばかりの幼児に対する母親の恨みをえがいた詩も含まれていた。それらの詩には、死刑所や大逆事件の12人の犠牲者が比喩的に使われているものがある。今回の発表は、晶子が出産を描いた詩で、なぜ大逆事件をモチーフとして利用したのか、彼女自身の出産体験と事件の犠牲者との間にどのような関係が見出せるのか、探求するものである。

**発表題目：詩歌に表われる『女人芸術』の精神**

**発表者：キャロル・ヘイズ オーストラリア国立大学教授**

『女人芸術』は1928年7月から1932年6月まで発行されていた文学雑誌である。編集者であった長谷川時雨は、作品、編集、印刷、デザイン、発行などのすべてを女性の手で行い、女性の精神解放を促進に貢献した。1920年代から現れてきた「モダン・ウーマン」は『女人芸術』の中で、いろいろな立場から描かれている。その描写は、当初は文学的な価値観の観点からであったが、次第に労働・農民運動やソヴィエトの紹介等に焦点がおかれるようになり、左傾化していった。

社会歴史家 Vera Mackie 氏によると、1920年代には『青鞥』などの女流雑誌を通じて、女性のための新しい政治主観性（“a new political subjectivity for women” (Mackie 1995)）が生まれたそうである。主流では女性らしさはまだ受動的な花、小鳥、寂しい星などのイメージとして表されていた時期であったが、『青鞥』や『女人芸術』の詩人・歌人は違うところからインスピレーションを得た。肉体的にも精神的にも家庭内のような限られたスペースの中での女性の人生や生活だけではなく、家の外の女性運動への参加などが詩歌のインスピレーションとなり、新しい詩声が生まれたと言える。

この同人雑誌に現れる「自由な精神」を追い求めていた女性たちの詩声（林芙美子、生田花代、岡本かの子など）を聞きながら、詩的なスタイル、テーマ、使用されている文学の特徴を分析し、その「モダン・ウーマン」の心を探って行きたいと思う。

## 発表題目：モダニズム詩と〈私〉—左川ちか詩にみる言語実験—

発表者：菊地利奈 滋賀大学准教授

小松瑛子（『北方文芸』第5巻11号収録「黒い天鵝絨の天使—左川ちか小伝」1972年）、富岡多恵子（『さまざまなうた—詩人と詩』収録「詩人の誕生—左川ちか」1984年）、江間章子（『埋もれ詩の焰ら』収録「華麗なる回想・左川ちか」1985年）、新井豊美（『「女性詩」事情』収録「「女性詩」の展望—その発生から八〇年代まで」1994年）など、女性詩人から〈ひっそりと〉評価されてきた左川ちか（1911—1936）は、生誕100年を記念する『左川ちか全詩集 新版』（小野夕馥編、森開社、2010年）出版の前後から、「一九三〇年代における女性詩の表現—左川ちかを中心として—」（藤本寿彦著『周縁としてのモダニズム—日本現代詩の底流—』2009年）、「左川ちかと映画—『暗い夏』と『アンダルシアの犬』を中心に—」（瀬本阿矢、『比較文学の饗宴』丸橋良雄編、2011年）、「左川ちか—青のコラージュ・ロマン」（寺田操著『尾崎翠と野溝七生子』2011年）、「終わりへの感性—左川ちかの詩」（水田宗子著『モダニズムと〈戦後女性詩〉の展開』2012年）など出版物が相次ぎ、現代女性詩の起点とまで評価されるようになった。

大正末期から昭和初期にかけて、数多くの女性が詩を書き、発表し、そして忘れられていったなかで、決して読みやすいとはいえない左川の詩の再読と再評価がすすむのは、左川詩のもつ〈主知的客観性〉に起因するのであろう。左川の詩には、村野四朗が批判した戦前の女性詩人の作品に「共通な、あの輪郭のぼやけた主観的成熟—じつは低次元の詩的デカダンス」（『日本の詩歌27 現代詩』「解説」、1996年11版400頁）がない。親しく交流のあった（男性）モダニスト詩人らに刺激と影響を受けた左川が、独自の詩学に基づき、モダニズム技法を自作に応用することで、主観的〈私〉から距離をおきながら〈私〉を表現することができるようになり、〈主知的客観性〉が生まれたのではないかと、私は考えている。

本発表では、左川の詩作品と、同時代の女性詩人の作品と、同時期のモダニスト（男性）詩人の作品とを比較しながら、左川が、当時の女性詩人らの作風にみられる〈私語り〉的手法を使用せず、モダニズム的手法をもって〈私〉を表現しようとしたところから、〈現代性〉がうまれたと仮定し、考察する。